

series Salamander in the circle

リ・コンストラクション

第四部

第二十五章

masquerade

峯村 明

リ・コンストラクション

登場人物

25・masquerade

249.

250.

251.

252.

253.

254.

255.

256.

あとがき

奥付

登場人物

桧山 健	H & L 財団・財務部門勤務
川 ひろ	健の妻
サーディク	エドミールのステージネーム
河合ヤスオ	H & L 財団・スポーツ部門で修行中の学生
ウィンディ・サトウ	H & L 財団・法務部門で働く職員
A. V, ラウレンス	H & L 財団・代表
A, ドストエフスカヤ	H & L 財団・法務部門責任者

25・masquerade

249.

ひろは頬を上気させ、目を潤ませて戻ってきた。「ただいま」、と。

リビングのソファでは夫の健があらぬ方へ目を据えている。手には開いた携帯。なにやらただならぬ雰囲気、ひろは、はたと足をとめて立ちすくんだ。

「——どうしたの？」さっきまで上機嫌だったのに。

「うん——」と言ったきり、その先がない。しばらくして、「真は？」

「途中で寝ちゃったわ」

「——ベッドへ置いてきて。ちょっと、話そう」

ひろはごくりと唾を呑み込み、うなずいた。

＊

健から例の画像を見せられて、ひろは床に座りこんだ。「なにこれ——」

「河合が送ってきた」

「河合くんが？」、と額に皺をつくる。「へんね——河合くん、今夜はイギリスへ行ってるんだけど——」

「イギリス？」

「ええ、ブライトン、とか言ってたわ、サッカーの試合を見に行くんだって。あたしも誘われたんだけど、急だったし、また今度ねって断った。これいつ送られてきたの？」

「つい今しがた」

「待って、画像に撮影時間が入ってるわ、今日？ 21時54分……二十分前？ え？ 二十分前……あたし、まだここにいたじゃない」

「——オレもへんだと思って、あれこれ思い返してたところだ。それに、エドミールのやつがおまえにキスしてるとこなんて、何度も見てるし」

「そうよね、なにを今さらよね」

河合は、健が下世話な話題を冗談でも好まないことは『昔』からよく知っている。何度も痛い目に遭っているのだ。だから——河合がこの手の画像をわざわざ健に送ってくるなんて、あり得ないし、イギリスへ行ってるはずの人間がベルギーにいる人間を撮影する……じつは行っていない可能性はあるが……物理的にも、二十分前にこの部屋で談笑していた人間を別のシチュエーションで撮影——いろいろあり得ない。

ひとことで言って、「へんだ」

「へんだわ」

健はしばらく考えてから、誰かにメールしようとして携帯を持ち直した。そこで、はたと思い出した。

「ひろ。これなんだけど」

「今度はなに？ ——これ！ あたしの声！？ え！？ なんで！？」

健は携帯を持っていない方の手で、顔色を変えた妻をけんめいになだめた。そして釈明、いや説明した。

＊

法務部のウィンディ・サトウなる女性がかつてアデレードの法律事務所で働いていたこと、いつか、桧山健の顧問だったこと、ヨーロッパで働くと言って意気揚々と去って行き、おそらくその足でH&Lの門を叩いたこと。

しかし、じつは前の雇用主からは解雇され、H&Lに提出した履歴書には不可解な詐称が見られること。H&Lは早くからそのことに気づき、彼女の動向を観察していたこと。ほぼ五年に渡って、ウィンディはごく普通に勤務していたのだったが——

「ウィンディは前の雇用主ウィリアムスのことも桧山健のことも知らぬ存ぜぬで通してきた。アデレードで働いたことなどない、と言ってな。だが、おまえがウィンディから聞いた桧山健についての数々は、事実間違いにない。いきなりこんな話を聞かされて、不愉快だったろ。最初から言っとけばよかったんだが、あとの祭りだな。黙っててわるかったよ、謝る、心から」

「う……ん……河合くんは……知ってたんだ……」

健はうなずく。「ラウレンス先生が、オレに近い人間には注意喚起してた。ウィンディがどんな思惑を持っているのか、皆目見当がつかなかったから、とりあえず警戒はしてたんだ。まさか、おまえのところへ行って自分から尻尾をだすとは、予想もしてなかった」

「……………」

「この画像を送って来たメールアドレスはたしかに河合のなんだが……」

「そうよ、どうやって撮影して、どうやって河合くんのアドレスから送ったの？」

「河合のアドレスを使って、あるいは別の人間のアドレスを使って、どこへでも送れるということか？ オレたちにとってはなにを今さらな図だが——狙いは何だ？ 何をしたいんだ？」

疑問符だらけだ。いやがらせ？ 河合の名を使って？ たとえ河合本人の仕業だったとしても——オレやエドミールをからかったとしても——何が面白いんだ？ ひどい目に遭いたいとか？ いや、ちょっと待て。これはオレだけのところへ送られたのか？ まさか——

＊

疑問は数えきれなかったが、健の懸念は半分当たっていた。

『河合のメールアドレス』から、例の画像を添付したメールが、その晩、大量に送りだされていた。

あくる日の朝早く。ブリュッセル本部午前3時。極秘の会合が行われた。場所はパウジーニが「総裁の執務室」と名付けた秘密の部屋である。

えらく不規則な時間だったがアレクサンドラとエドミール、それと保安部の責任者が部屋に通され、ラウレンス氏はアルゼンチンから、河合はイギリスから、あと数名がリモート参加だ。

《さっそくですが皆さん、興味深い話をしましょう》ラウレンス氏がメガネを光らせて言った。いつになく物々しいとさえいえる雰囲気。

《五時間ばかり前。私はメールチェックをしていました。すると、メールボックスにカワイからのメール着信が表示されたんです。開けてみると……カラでした》

《お、俺からの？》

《皆さんのお手持ちのデバイスのメールボックスにも、カワイくんからのメールが届いているのでは？》

《ええ、来てましたけど》《カラメールでしたよ、操作ミスかなにかだと思って消してしまいました》
《同じく。空っぽでした》

《え？ え？ 俺？ え——何の話？？》

「これ、ですな」と、サーディクは自分のデバイスの画面をリモートのカメラに向けた。

「ええ、まさにそれです。ケンに届いたメールには、その画像が添付されていました」

カワイことヤスウはマミヤとバイスロイの金星を巡る関係を、もしかしたら一番よく知っているかもしれない。バイスロイのマミヤへの接吻という行為が敬意以外のなにものでもない、ということも。

だから、《え、これが？ どうかしたんすか？》という反応になる。ラウレンス氏は河合の発言を聞いてから切り出した。

「メールを送信した『カワイくん』はですね、添付画像を見た人はびっくり仰天する、と思ったんでしょう」

《よくわかんねえんすけど先生。だって、当のおっさん、びっくりしてねえじゃねえですか》

「……………」

「ま、まあまあ、サーディク！ カワイ、メール送信者の狙いはわれわれの間にひびを入れることだと思われるんですよ。その意味で、『カワイくん』の目論見は外れたようですね」

《あの一、そのメールって、いつの話なんすかね？》

《五時間ほど前です。ケンのデバイスによると、22時14分43秒に受信してる。ちなみに発信は22時14分42秒》

《ちょっと待ってくださいよ！ 俺、タベからイギリスに来てるんす。サッカーWカップ予選リーグ、クロアチア vs マルタ、どっちにもいい選手がいるんだ、俺ははやく話がしたくて、タベはわくわくして観戦してた。ねえ、そんな時に、どんな酔狂でみなさんにそんなメール送らにやならんの！！》

《カワイ、ここにいるみんなは、あなたが何よりスポーツに熱心な人間だとわかってます。けれど、『メール送信者カワイ』はそのことを理解していなかったようです》

「——つまり、『メール送信者カワイ』はH&Lの部外者だと？」

《ええ。おそらく、『メール送信者カワイ』は内部の人間ではありません。今お集まりいただいている皆さんはそれぞれ所在地が異なります。ですから『メール送信者カワイ』からのメールを受信した時刻はそれぞれ異なります。しかし送信の時刻は同一。なにが言いたいかというのですね、送信者がどこから送ったのかがわかるのですよ！ 意味がわかりますか？》

「オレのところにほとんど瞬時に届いているということは——少なくとも、ブリュッセル市内だ！」

《発信元はブリュッセル市内。もっといえ——館内》

河合のメールアドレスを使う館内の部外者。その場の者たちをぞくっとさせる言葉だ。

「少々、不可解に思うのだが」、と発言を求めたのはサーディクである。「ラウレンス先生はじめ、みなさんに送られたメールはカラだったそうですが……」

「オレもそれを思った。サーディクとオレに送られてきたメールでは画像を見ることができる。……なぜだろう」

《そのことね。証拠として残したんでしょう。それもひとつではなくふたつ。全部消してしまったら、『館内の部外者』の目論見も、その存在自体も分からなくなってしまうから》

「——どういことですか」「どういことですか」

《サーディクとケンのを除いてメールの中身だけが消されたんです。細かい仕事ですね。たいした手際です》

「誰かのしわざ？ まさか——」

《ええ、私もまさか、と思いましたが、ほかに考えられないので》

「館内の部外者とやらも不気味だが、送信中のメールの一部を残し、一部を消す、そんなことができるのですか、先生。だとしたら、こっちも十分……」

サーディクは、十分不気味だといいかけてやめた。

《ええ、いずれにしても、常識的、物理的にあり得ませんよね。しかし、じっさい、それは起こったのです。誰かが攻撃を仕掛け、誰かが防いだ。それは誰だ。ケン、あなた、心当たりがあるという顔してますね」

「え？ い、いや、まさかそんな」

《彼は物理法則を無視してしまう。そう言ったのは、あなたですよ、ケン》

「言いましたよ、たしかに」

ケンはしぶい表情でそう認めた。たしかに彼にはいろいろなことができる。メキシコ国立人類学博物館の外壁をすり抜け、電子錠や警報装置を解除するなど、朝飯前だった。

その時は、なんて便利な能力だ、くらいにしか思わなかったが、物理法則の中で生きる人間の目に見えない世界ではなにが起こっているかわからないということではないか。

(ひょっとして彼は……『メール送信者カワイ』、あるいは『館内の部外者』とすでに接触してしまっているんじゃないだろうな……)

252.

いやな予感を振り払うようにしてケンハ「話しておきたいことがある」、と前置きし、「昨夜……ひろと話したんだが……ウィンディの気配に覚えがあると言うんです」

全員の目がケンに集まった。彼は卓上で組んだ自分の指先を見ている。

「六年ほど前、彼女がまだ高校生だったころ、数カ月にもわたって、妙なモノに執着されたことがあった。"そいつ"の気配に、似ているような気がする、と」

《それってさあ……ひろが陸上やってたころのことじゃ……》

「ああ。インターハイの時分だ」

《俺覚えがあるぜ、それ！ ひろのやつ、目が泳いでたり、ぼーっとしてることが多くてさ、そうだ、あいつ靈感が強いから何かとしゃべってんじゃねえかって誰かが言ってたな、なにしろ、異様で、鬼気迫るっていうか。おいっ、おめえなんで応援に来なかったんだ！ インターハイ終わって半月もしてからこのこやって来やがって！！》

皆の関心がいやがうえにも高まってしまったのがわかって、健は迷惑そうな顔をした。「今はそういう話してるんじゃないだろ！ "そいつ"とウィンディの、感じが似ているって話だ！！」

「ケン——それはもしや——」

「いや、サーディク、似ているというだけのことだ。感じは似ているが行動の特徴が明らかにちがうと、ひろは言ってる。オレの印象だが、なんていうかな、"そいつ"に比べてウィンディは、抜ける」

「抜けてる？」

「そうだ。疑問点をいくつも置くということは、意識的にそうして、狙いを絞らせないようにしているのか、あるいは」

《あるいは？》

「単に、バカなのか」

《……………》

＊

——その者はたいへん強い力の持ち主。けれど、力の強さを帳消しにするほどムラ気で、計画性がなく、することなすこと行き当たりばったりの低次妖怪。敵対すればたしかに恐るべき相手ですが、力があるというだけ。知能はきわめて低いのです——

＊

「……それはまた……えらい云われようだな」

奇しくもサーディクは、かつてスクナがミツハに対して言ったのとまったく同じセリフを口にしていた。そしてケンが続ける。ほとんど確信していた。その者の正体を。

「"そいつ"はものごとを複雑にし、様々に画策し、混乱を招く。人間の世界にどんな影を落とそうが気にしない。翻弄される人間を見るのが面白くてたまらない。面白がる。それが顕著な特徴なのだ」

「一方、オレが知ってるウィンディ・サトウは、己の欲する感情、欲望を優先する。そういう人間だった。頭はいいのに肝心なところで低次の地が出てしまう。ウィンディは、自分と似ている"そいつ"と通じてしまったんじゃないだろうか」

《うん……本部建物は電子セキュリティシステムの上に結界を被せてあるので、滅多なものは侵入できないはずなんです。なのに、今度のような事が起こったということは、なんらかの方法で入り込む足掛かりを作ってきたのだ》

《ウィンディ・サトウがそれか》

おそらく……と、ラウレンス氏は考え考え呟いた。
《ウィンディにとり憑いて侵入できたとしても、滞在できるのはほんのわずかな時間。結界のエネルギーに耐えられないはずですから。そのわずかな時間を利用してサーディクとひろを撮影し、カワイのメールアドレスで……》

253.

限られた時間の中で情報は共有され、会議は解散した。カラメールをばら撒くそいつ者の汚名が払しょくされた河合はひとまずほっとしていた。

ラウレンス氏とアレクサンドラとが『総裁の執務室』に残った。アレクサンドラ・ドストエフスカヤはウィンディの直属の上司である。

彼女は言った。「ケン、"そいつ"の名前を、あたくしに教えてくださいませんか？ だめ？」

ケンとはラウレンス氏と目を見交わす。ラウレンス氏も同意見だとわかる。
「お教えしたいのは山々ですが、ドストエフスカヤ先生、"そいつ"は自分の名前に敏感です。誰かが呟いたとわかればすぐに飛んでくる。単に自意識過剰なんだろうが、一種の召喚だといえ、どれほど危険か、お分かりいただけるでしょう」

「なるほどね」と肩をすくめる。「あたくしは平和な時代のメッサーナしか知りません。この件に関してはあなた方に従いましょう」

「恐れ入ります」

「で、危険なのは"そいつ"だけではないのでしょうか？ サーディクが気にしていたわ」

「ええ」こっちはもっと頭が痛い。「ひろが一度撃退しているんですが。簡単に引っ込むとは思えないし、"そいつ"とは違った意味で手段を選ばない。おそろしく狡猾で残酷。サーディク本人には手を出さないが、彼の関係者、もっといえば、女性を、標的にする。壊してしまうんです。女性としても、才能の持ち主としても」

「なんてことを……」

《ドストエフスカヤ先生》、とラウレンス氏が声をかけてきた。《こっちの方があなたにとって危険かもしれません。あなたは"彼女"とそういう縁がある》

ラウレンス氏の心配げなまなざしに、アレクサンドラはうなずき、言葉の意味を察したと示した。そして、言った。

「気をつけることにしましょう。さて、ウィンディは、そろそろ潮時かしらね」

最後にラウレンス氏は言った。《向こうがどんな力を持っているのか、また、何が起こるのか、見当もつきません。くれぐれも、相手を侮らないでください》

254.

ドストエフスカヤ先生の椅子の上で二匹のネコが押し合いへし合いして居場所を確保しようとしている。

(気が知れないわ。ネコを職場に入れるなんて)、と、ウィンディは考えている。元よりこの手の動物は大嫌いだ。うわべは微笑を浮かべて先生の道楽動物を眺めているが、実は大嫌いである。その本音のせいで二匹のネコはどちらもウィンディを避けて通っているが、ウィンディ本人はなぜネコちゃんたちが自分に懐かないのかわからない。笑みが足らないのかしらと、ますます微笑むが、ネコたちはますます遠ざかるのだった。

今日も朝からネコたちはオフィスを我が物顔に歩きまわっている。彼らが夜のどこで過ごしているのか、市内でアパート暮らしをしているウィンディは知らなかった。(彼らはドストエフスカヤ、サーディク、ヒヤマと、各居住区を渡り歩き、まんべんなくかわいがられていた)
ウィンディが出勤すると、はや、彼らは法務部のオフィスでくつろいでいる。一匹は席を占領し、もう一匹はことあるごとにデスクの上だ。

(ネコはいいわよね気楽で。朝から気が抜けるわ……ん?)

ふと横目でみれば、先生のデスクの引き出しのひとつが半開きになっているではないか。

(し、信じらんない——)

*

オフィスのメンバーは十人ほどいたのだが、それぞれ"専門的な"仕事をしていたので、仕事の話になることはほとんどなかった。

ウィンディが任されている仕事は同部においては難易度の低いものばかりで、中には架空の仕事さえあった。ありていにいって、それほど彼女は信用されていなかった。本人が知ったら自尊心を大きく傷つけられたかもしれないが、彼女は与えられた仕事は(割と楽かも)と思っていたし、その割に高給で、有給休暇はちゃんととれる、福利厚生は十分すぎるほどだったから、なんの疑いも持たずに働いていた。そして市内のアパートへ帰れば直毛のウィッグを外し、豪快にメイクを描き足す。引いたり足したりして、あげく自慢のボディラインを見せつける服装に着替えて街へ繰り出す。勤務先以外の人間関係はじつに豊かだった。

(もう少しお金を貯めたら、あんな地味な会社やめて独立するんだ。ドストエフスカヤ先生も応援するといってくださいるし)

男友達もいる。

本人曰く、『危険な男だ』。名前はベネトナシュ。職業は不詳だがお金持ち。ちょっと陰りがあって神秘的、顔はいい方で、話題豊富で面白い、五年付き合ってるけど、(まだ)飽きない。

(あたしには危険くらいな男が、ちょうどいいのよね)

ベネトナシュと出会ったのはブリュッセルに来てからだった。いや……もっと前からかもしれない。なんだか記憶があやふやで、はっきりしない部分がある。自分であって自分でないような。けれど、べつにどうということはない。

(あたしは法律に通じている。懸命に勉強して難しい試験にもパスしてきた。パワフルで魅力的で、みんながあたしに一目置く。こわいものなんて、なにもないわ)

どんな状況でも切り抜け、どんな相手でもいい負かす自身があった。こわいものなんて、なににもなかった。『危険な男』と付き合うのもお遊びのうちだった。

255.

自分の好みが少しずつ変わってきていることに気づいてはいた。以前は仕事中から好みほぼ全開だったが、いつの間にかオンとオフを切り替えるようになっていた。彼女にとって昼間の仕事はオフで、夜がオンだった。日光より夜の闇、それも月光や星の光ではなく人工的な明るさを好むのだった。

ある日。ベネトナシュよりもっと顔がよくて面白そうな男がH&L・芸術部門にやって来た。聞くとところによるとヨーロッパの某国の貴族だという。

本当かどうか知らないが、ウィンディの興味をかきたてるのには十分だった。

彼に比べれば、一緒にやって来た"昔の男"桧山健など.....どうということはない。六年前も中学生のような日本人の女の子に熱をあげていたが、このたび同行してきたケンの妻はその時の女の子で、相変わらず中学生のような顔をしていた。

なあんだ、こういう趣味だったのね、とケンにはすっかり興味を失くし、子どもはいったい誰に似たんだというくらいかわいいので目をつけておいた。

とにかく、今のところは新入りアーティストのサーディクが彼女の匂だった。

しかしこの新入り、ウィンディ必殺の秋波になびかないどころか、まったく気がつかない。もっとも、直毛ウィッグ、ノーメイクの勤務スタイルから発する秋波に気づけという方がムリだ。そのうえ彼は館内に居住していてあまり外に出ないし、常に二名のお付きの者というおまけがくっついて

そこで作戦を変えることにした。彼はどうも桧山健の妻と親密な関係にあるとわかってくる。

(これを使わない手はないじゃない！)

サーディクと健の妻ひろとの親密な画像をばらまけば彼ら三人の間がぐらつくのは間違いなしだ。ぐらつかせておいてサーディクをいただいてしまおう。そう夢想すると居ても立っても居られない。(こんなの、久しぶり……)胸はどきどき、からだはうずうずする。なかなか手に入らないものほど欲しくなるのは世の常。でも、どうやって？

「心配事かい？」と、言ってきたのはベネトナシュだった。ウィンディの悩みを聞いたベネトナシュは、「まかせなさい」と言った。「ワタシが協力してあげる」「ホントに？」「長い付き合いじゃないか。キミの願いの一つや二つ、叶えてあげよう」

ベネトナシュがどんと引き受けてくれたので、ウィンディはすべて彼に任せた。

その後——記憶があやふやになる。

「そのかわり、ワタシのいうことも聞いてくれるね」と持ちかけられたが……なんだったかしら。何か交換条件があったのだけれど……

*

先生のデスクの引き出しのひとつが半開きになり、中をのぞき込んだネコの爪に、鎖が絡んでいる。黒い艶消しの金属製で、同じ素材のUSBメモリが繋がっていた。
メモリの中央に"TS"の刻印。Top Secret！

(——これだわ——)

256.

法務部の資料庫は重要な場所で、ドストエフスカヤと彼女の腹心、法務部ナンバーツリーのレアニド氏、この二名の生体認証が揃うことで初めて……物理的にも電子的にも……入室できる。ちなみにレアニド氏は今生、アレクサンドラ・ドストエフスカヤと血縁関係にはないが、彼の魂はあのパルダリス氏である。また法務部の職員は出身地域も国籍もバラバラだが、かつてパンテオラと共に働いていた者がほとんどで、面白いことに、ベールをめくってみたらかつてのメッサナの心

臓部そのままだった、という構成だった。今ではジャガー族の魂も参加しているという完璧さである。

であるからして——そのようなところへ、ウィンディ・サトウが、彼女がいくら優秀な弁護士だったとしても、就職できたということ自体が不思議なことだった。求人があったわけでも、(本人が桧山健に語ったように)勧誘があったわけでもない。働かせてくれという、自薦だったのである。

履歴書の詐称などおかしいことはおかしいが、かといって実害があるわけではない。彼女がH&Lへやって来た目的など最初からなかったのかもしれない。そうこうするうち、年月は経って、桧山健とサーディクが加わり、ついに事態は動きだした。それはウィンディのささやかな個人的欲望を叶えるという目論見から始まった。

桧山健の妻とサーディクとの、見ようによってはスキャンダラスな画像をばら撒いたのだが、なんの騒ぎも起きず、桧山もサーディクもごくふつうに挨拶を交わして、ごく普通に仕事についていた。画像を送りつけられた方もみな、通常運転だった。

何らかの騒動が起こるのを期待を込めて待っていた実行者は、予想が外れて(ちっ)と舌打ちし、いらいらと爪を噛んだ。それは不発に終わったが、ウィンディが思いがけないものを持ち込んだ。

H&L財団法務部の、『Top Secret』と銘打ったデータが詰まったUSBメモリ。の、コピー。それはまさに、ベネトナシュが長年に渡って欲したH&Lの秘密を暴く道に通じるものだった。

あとがき

ここしばらく週刊できていましたが、今回は盆と正月ならぬ、盆とお葬式が重なってしまい、週刊は諦めました。

切れ切れに書いたので話がちゃんと繋がってるかどうか…

プランはもう、いろいろあって、どういう順番で…とか、全部書いてると流れが悪くなる、ひょっとして、はしょった方がいい？ 番外編作る？ あ～頭痛が痛い～

2025年8月16日 記

奥付

リ・コンストラクション

第二十五章 masquerade

2025年 8月18日初版発行

著者

峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材

[イラストAC](#)
[ツキトサカナ](#)

制作

Puboo

発行所

デザインエッグ株式会社